

所 陵

ISSN-0913-1906

No. 46

関西大学博物館集報
平成15年3月31日発行

[SENRYO・KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



銅鏡 Japanese Mirror

目次

理事長『博物館』を語る—(2)これからの関西大学博物館—	2
調査日誌から回顧する高松塚発掘30年	4
大阪市立自然史博物館(Ⅱ)	7
青葉を飾る	9
濱本正吉氏伝来の具足(甲冑)	13
諏訪湖の石器と土器—本山資料830番—	14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel 06-6368-1171 (直通) FAX 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/museum.htm>

理事長『博物館』を語る

—(2) これからの関西大学博物館—

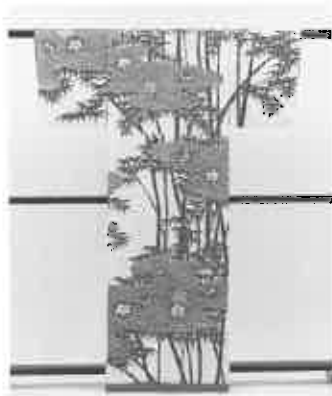
4. 小袖について

—関西大学博物館にご寄贈いただきました小袖も大阪市へ寄贈されていたわけですね。

理事長：全部寄贈することになってました。それで大阪市の博物館の人やみんな、あの、僕のコンサルタントやね、みんなに関大の博物館を見に来てもらったんです。「うちの博物館どう思う？」てね。そしたら「色艶がおまへん」て。「女の子多いのに、女性のかんざしもあらへん」て言うんです。それでね、「ちょっと待てよ。えらいことした、それな、もう大阪市に寄付してもうた。なんとか取り返す方法ないかな」て言うてみたんです。自分が関大博物館行ってね、かんざしも無いと言うといてね、それやのに「嫌や」と、「貰うたものは俺のモンや」とは言えません。それで結局、小袖を分けてもらったんです。

—おかげさまで関西大学博物館にも華やかさが加わったわけです。

理事長：この小袖は、重富、重新¹⁾、重遠²⁾の時の最後の締めくくりの頃の小袖らしいです。間重富とは全然関係はないんです。ただ、その時代の背景として、うちの父親が集めたものなんです。



白縞子地松竹梅紋襦袢小袖（打掛）

5. 羽間文庫と大阪と関西大学と

—平三郎氏は近代大阪の郷土資料も沢山集めていらっしゃいましたね。

理事長：4代³⁾の江戸時代の天文学者がね、ずうっと天文台で観測やって、それを、うちの父親がもうひたすらに、主には重富を軸に祖先検証をやってきた。そのうち時代背景も知りたい、となって重富に関わった人物や大阪の地域資料に触手を伸ばしたんです。

戦後、親父は市会議員やったり、都市区画整備委員長にもなってたんですが、その時にうちの海老江のあの家とね、富田屋橋の近くの所との換地の話が大阪市から内々であったんです。それをうちの親が断ったんです。何で断ったか言うたらね、「羽間文庫が海老江で定着してしもうてるから、わしは海老江から離れん」て言うてね。時価にしたら坪200万円の土地と、100万円の土地と換えたる言うてんのに「あかん」「いらん」言うて、頑張って断りましてん。僕やったらすぐに換えるけど。(笑)

まあ冗談はそれくらいにして、うちの父親は関西復権の思想があって関西大学を選択したんです。大阪が好きやったんですね。僕が学校行くときもね、東京の学校も合格してたんですよ、そやけど「大阪から離れるのはあかん、関大へ行け」言われましてね。親父は本学の大正6年卒なんです、亡くなる直前までずっと同窓会に出席してました。「六念会」いうて、大正6



海老江八坂神社

1) 重富の長男。1786(天明6) — 1838(天保9)

2) 重新の長男。? — 1860(万延元)

3) 重富、重新、重遠、および重遠の子息重明(? — 1893(明治25))の4代。

年の卒業生が中心に、4年5年6年の人が一緒に集まってやってた同窓会があるんです。昭和27年から54年まで20年以上続いた会やったんですが、親父は亡くなる年の昭和47年まで出席していました。

——平三郎氏は、祖先を愛し、海老江の土地を愛し、そして関西大学を愛していच्छあったんですね。

理事長：小袖や鎧を関大博物館へ入れたのは、ひとつにはそんな父親への供養に、という思いもあったんです。

6. 理事長『関西大学博物館』を語る

——最後に、理事長先生がこれからの関西大学博物館についてどのようにお考えか、お伺いしたいと思います。

理事長：「色艶がない」と言われた話をしましたが、それに加えて、僕は、学生さんのための博物館やて言うのに学生さんに対するキャンペーンが無い、それから、親近感が無い、と思うんですね。3万人の学生の33%が女子学生で、それやのに櫛・簪、要するに、女性が興味持ちやすいものが一点でもないと。ま、今度小袖入れたからええんですけど、末永先生の甲冑やとか何やとか言うて、考古学的にこう言うても、学生さんにはピンと来んのやないかと。もちろん、学問的に充実したものでないといかんのですが、まずは学生さんに親しめるようなものを置かないと。難しいところに簡単なものを置く。これがね、アイキャッチャーいうて、お客を振り向かせる方法やね。

それともう一つはコンセプトをしっかりせなあきません。今の博物館には「博物館ここにあり」というような、存在価値の展示が無いんです。しかも来る人に催しの認知がちょっと少ない。学生さんの中にはね、こんな立派な博物館が関大にあることを知らない人もいます。

それと、お土産を何か用意したいなあ。来た人に気楽にさっと渡せられるようなもので、学生さんの喜ぶような、あるいは博物館に来た人の記念になるような、そんなものをお土産にできへんかな。学生さんがね、「博物館行ったらこんなもらえる。ほんなら別に博物館は見たないけどもらいにだけ行ったらか」と。集客、これが大事ですな。



羽間平安理事長（浅野忠義銘
具足を前に）

最後にもうひとつ、博物館に関西大学の歴史がない。関大には百何十年の歴史の、脈々とした流れがあるわけです。関西大学の博物館に関西大学の歴史がないなんてちょっとさみしい。やはり関西大学の歴史を語れるメモリアルゾーンであることが必要やと思いますね。

要するに、親しまれる博物館であって欲しいなというのが僕の本音ですわ。だから、これからの博物館のあり方と言われると困るけど、当面は広きを目指す、ということですかな。来た人に楽しんでもらうサービスを提供すること、さらに、くつろげる空間であること。学生さんが身近に感じて、自然に利用できる。そして関大の歴史も感じられる。そういう博物館を目指していきたいと考えております。

——本日はお忙しい中、長時間にわたりお時間を割いていただき、誠にありがとうございました。理事長先生のお話を参考に、より親しめる関西大学博物館を目指して工夫していきたいと思えます。

（このインタビューは関西大学博物館長および博物館事務室が平成14年7月25日に行ったもので、前号と今号の2回に分けて掲載させていただきました）

【お詫びと訂正】

前号の相蘇氏の脚注で現大阪歴史博物館館長としたのは副館長の誤りです。ここにお詫びして訂正いたします。

調査日誌から回顧する高松塚発掘30年

森 岡 秀 人

阪神・淡路大震災により多くの本や資料に紛れ、全く行方不明になっていた学生時代の発掘調査日誌が数冊まとまって出てきた。なんとか捜し出して欲しいという依頼が昨年は殺到して絶え間無かった。2002年は高松塚古墳発掘30周年に当たり、当時の生々しいようすを知りたいという意図から、高松塚発掘に充てられた大学ノート1冊に書き込まれた私の調査日誌が捜し物の対象となっただけ。地震の後遺症の一つであるが、蔵書や資料の多くは整理もされず箱詰め状態で、未だに自宅以外にも分散保管している。箱数も多く、地震の後始末が一段落した頃に借りたトランクルームなどは物を出して探す余裕もない狭さとなっている。よく出てきたものだ和我ながら感心したが、暮れに体力を振り絞り、長時間大掃除をしたことが功を奏したようである。個人的に撮っていた写真なども一緒に見つか、副産物があったことに関係者は喜んだ。

さて、私の考古学研究は、現場・現物第一主

義に徹してきた。生まれつき頭が悪く、記憶力の鈍い私は、見て聞き、触れて、重みや肌触りを体に焼き付ける形で考古学を勉強してきた。体感こそが研究の第一歩で、実測図や写真のみで遺跡や遺物を理解する力を大きく欠いていた。だから、考古学専攻生としては落第生であったとみて大過ない。そして、記録を努めて取ることによって先に述べた弱点を補ってきたように思う。目は両眼ともにすこぶる良く、50歳を超えた今でも左1.5、右2.0を維持し続けている。遺構や遺物を克明に観察することは今でも一向に苦にならないし、その機会はどうな時代・時期のものでもすべて楽しい。各地の発掘現場に足を運ぶことも多い。財産は何もないが、見たこと、聞いたこと、遺跡を踏むこと、遺物を手に取ることが何よりも価値ある財産となっている。

学生時代、末永雅雄先生から教わったことの一つに「清貧」という言葉があった。考古学を志す者は家に財産なく貧しくとも、清らかに研



高松塚古墳遠景 1972年3月2日

南の丘陵、ミカン畑の中をより西側に進んだ地点より北側に向けて撮影。一面雪がまだ溶けずに残っている。(筆者撮影)



壁画検出の運命の日 3月21日午前

とりあえず、家形石槨の右半分の埋土除去を開始。壁画の存在も知らず、黙々と発掘作業を進める(筆者撮影)

究を行い、形なくとも身に残る学問そのものが財産だと考えよということであった。

記録重視主義者の私は、その後、発掘調査の担当者になっても参加者の日誌を点検して記録の不十分さを指摘する悪癖を振る舞う経緯をたどったが、いま久しぶりに高松塚発掘の日誌を手に取り、31年前を思い起こせば、当時の1日1日が鮮やかに蘇り、一挙手一動作までもが脳裏で再現できるから不思議である。

1972年3月21日。火曜日。天候曇りのち晴れ。網干善教先生の指揮下、朝から発掘を行った関西大学考古学研究室の学生は、4回生の松本信夫・灰掛薫、3回生の石田修・東永津子、2回生の森岡秀人・中上京子、1回生の村井政一、龍谷大学考古学資料室3回生の島田隆昌の8名。極彩色の壁画はその日の発掘調査で正午過ぎに検出された。劇的な一瞬を迎えた日であったが、現場のみんなは比較的冷静な態度で「世紀の大発見」に対処した。

午前10時半、石槨の天上石南端の右半分を露出させ、家形になることが判明し、壁体は無残にも穿つ盗掘痕跡も姿を現したが、その時には四神図や男女人物群像、星宿などがその下で安らかに眠っていることなど、全く予想だにできなかった。日誌には版築土のコンクリートのよ

うな堅さ、凝灰岩の破碎片の中に切石面が存在したことなどが記されており、盗掘坑の形状や時期についても詳細に記されている。

現場に残留し、発掘を継続して最初に壁画と遭遇することとなった網干先生と二人の学生、昼食後、壁画を実見した6人の学生に加え、先生と共に発掘を担当した伊達宗泰先生、直宮憲一・藤原学の両4回生、1回生の亀島重則の3名の学生が午後から調査に参加、夕刻までに現場では壁画の配置がおおよそ記録されるところまで調査は進み、石槨内部の清掃発掘の方法なども打ち合わされた。

頃合いをみて、最も体の小さい女性の東さんが頭から中に入り、壁画の詳細を外に伝えることになったが、1年後輩の私は彼女の足を持ち、少しずつ中に入れる役割を担うとともに、黄泉の世界から発せられる彩色画の構成に関する第一報を野帳にしっかり書き留めた。その時の緊迫感と興奮は今でも忘れることはできない。その夜、余韻醒めず、深夜に及ぶまで調査日誌を書き続けるのだった。

衝撃の一夜が明けて、3月22日の水曜日。天候は晴れ時々曇り。調査器材の調達係をしていた20歳の私は、洗面器・ガーゼ・さらし・板材・紐・麻袋などを新しく揃える。午前11時過ぎ、



ようやく口が開いた盗掘孔 3月21日午前
家形石槨の正面の右半分だけが、ようやく姿を現わし、盗掘孔の一部がボツカリと空いた。内部はまだわからないが、孔の入口部分の広がり調べる網干善教先生。壁画検出の1時間前（筆者撮影）



調査日誌

石槨内の発掘が開始される。槨内の排土は主に網干先生が行い、時々伊達先生も中に入った。私はすぐ外で土運びや道具・図面の指示に応じつつ、聞き書きを中心に遺物の発掘されるようすをつぶさに記録した。内部は狭い空間で採光も悪い。中腰になっても頭や背中がつかえそうで、体の向きを変えるのがやっとなという厳しい制約の下、作業は壁画の保護が先決なので懐中電灯を頼りに急ピッチで進められた。

午後2時15分、石槨内の先生からメモを取るよう指示が飛ぶ。「石槨の北西隅の底石上に、約3.5 cm程の薄い粘土の堆積層が存在する。その中には微量の棺材が混入する。」一番最後に、ゆっくり時間をかけて入った流入土のようであった。

盗掘による攪乱は棺とともに埋葬遺体にも及んでいた。以後、次々と墓室の中から残存した副葬品が顔を出し、38 cm×75 cm程度の盗掘孔から外に出され、それらを記録していった。銀製露金物・冑金・石突・山形金物・倭鋌・留鋌・ガラス製丸玉・琥珀製丸玉などが取り残された遺物としてみられた。直径3 mm前後のガラス製粟玉は、4 mmメッシュの篩を通り越して下に落ちるものを視力の良い私が最初に見つけたもの

だった。それは最終的には、出土個数936個の多きを数えた。

3月23日の床面精査では、西壁に寄って漆塗木棺の残存部分が姿を現し、棺材には所々に金箔の付着が看取された。金銅製飾金具は心葉形の反復が実に美しいものだった。その日の午後3時には、鏡の出土が告げられた。白銅製の海獣葡萄鏡であり、唐の文化や墓制との関係を現場で実感するに十分な資料の出現であった。

この日の午後7時頃、石槨内でのすべての作業が終了し、私を含む学生数名も交替で石槨内へと入った。彩色豊かな壁画の描線を近くでじっと眺め、この墓室の主に、あるいは画師になった気分になり、高松塚の石槨に入る機会もこれが最後になることを予感するのだった。

高松塚の発掘にたずさわった1972年。日本も世界も激動の時が流れていた。私の日記には、横井庄一元軍曹グアム島で発見、連合赤軍浅間山莊銃撃戦、イスラエルのテルアビブ空港乱射事件、施政権返還で沖縄県スタート、半世紀ぶりに中国との正式国交回復、日本列島改造論の発表等々……。目まぐるしい世の動きが記されている。考古学も冷や飯食いから脱却し、市民権を得始めつつある時代であった。



午後3時の休憩は墳丘の上で 4月2日

見学に来跡した橘高（きったか）和明同輩と記念撮影。手前は東トレンチの西端。1ヶ月愛用したスコップを手にして。



連日つめかける見学者を前にくり返し調査の経過を説明する網干先生 4月上旬

この日は、小学生や幼稚園の園児がことのほか多く、先生の語りかけも、おのずと易しい口調となった。解説用に原寸大のカラー写真も用意され、石槨内への臨場感を誘った。（筆者撮影）

大阪市立自然史博物館（Ⅱ）

鉄 川 精

大阪市立自然史博物館の歴史、調査研究活動、資料収集保管活動、展示活動、普及教育活動などの事業内容、標本の種類、標本管理などの概要について、既に本誌23号（1991,5）に述べてある。ここ数年の間に、博物館の施設拡充や事業内容の充実が見られたので、前回の続報ということから大阪市立自然史博物館（Ⅱ）とし、これらについて簡単に紹介することにしたい。

花と緑と自然の情報センター

博物館本館の西側に、自然史博物館と長居植物園の「緑の相談所」とが連携して新たに造った施設で、2001年4月にオープンした。地上2階、地下1階の鉄骨鉄筋コンクリート造、建築面積3,507㎡、延床面積8,150㎡、この建物の完成で博物館の展示、収蔵庫、特別展示室、学習コーナーなどの分野で大幅に機能がアップされた。1階は緑の相談所の機能を高めた「花と緑のエリア」があり、園芸相談コーナー、学習コーナー、図書コーナー、実習スペース、軽食喫茶コーナーなどが設けられている。博物館部分は「自然エリア」となっており、「花と緑のエリア」との間には仕切がなく自由に行き来できる。2階には花と緑のイベントゾーンと特別展示やイベントに使用できる大きな空間のネイチャーホールがある。この花と緑と自然の情報センターの1階および2階部分は、「花と緑のエリア」「自然のエリア」とともに無料開放施設である。特別展は2階の「ネイチャーホール」で行うため別料金となる。

自然のエリア

常設展示として「ネイチャースクエア・大阪の自然誌」、博物館本館の普及センターの機能を担う「ミュージアムサービス」と「自然の情報コーナー」が1階に設けられ、2階の「ネイチャーホール」では特別展が行われる。地下には新しい収蔵庫が完成している。

1. ネイチャースクエア・大阪の自然誌

博物館の常設展示エリアで、この展示室には大阪府下28コースの「自然観察地図」が展示されている。展示は北摂から生駒、和泉へと地域

を主な山ごとに区切り自然の特色を解説する「山地」、生き物の住み場所をタイプ別に紹介する「丘陵」「平野」の各ゾーン、これらの地域をつなぐ「水辺」コーナーがあり、展示室中央には「淀川」が流れ「大阪湾」へとつながる。

「淀川」は河口から3川合流点まで周辺の様子とともに航空写真でたどることができる。最奥部には魚、水生昆虫、水生植物などを生きた姿で展示するコーナーもある。

このネイチャースクエアには、①博物館本館への導入部としての役割、②大阪の自然のビジターセンターとしての機能、③長居公園の自然のビジターセンターとしての機能がある。博物館の導入部分としては、身の回りの自然に興味を持ってもらい、さらに本館の展示や特別展で深く学んでもらう「きっかけ」になるコーナーを目指しており、大阪のビジターセンターとしての機能は、この展示室単独で充分に果たせると思われる。

2. 自然の情報コーナー

この情報コーナーは次の4要素からなる。①本館の普及センターと同様に学芸員の常駐する相談カウンターとしての役目があり、希望すれば実体顕微鏡などが利用できる。②図鑑・解説書などの図書の閲覧、コンピューターによる情報検索ができる椅子16席のコーナーである。③多くの標本を陳列し実物と対比して調べることができる。④博物館のホームページ・収蔵標本情報、インターネットを通じて世界の博物館にアクセスできるコンピューター端末が検索用6台、音声、動画用に3台が配置されている。

この情報コーナーのコンピューター端末で様々な情報提供が受けられる。大阪市立自然史博物館にインターネットシステムが導入されてから6年ほどになり、この間に培ったノウハウが生かされている。展示用に作った物を博物館外にインターネットサーバーを介して公開できる。展示用プログラムを博物館外に提供していくために、博物館と利用者のプロバイダーを結ぶ回線が、これまでの約12倍に増強されている。

その結果、画像・音声・動画なども今までよりもスムーズに取り出せるようになっている。

ホームページは博物館からの情報発信だけでなく、「大阪の自然」を観察していくための情報源にもなる。捕まえた様々な生き物を、いろいろな方法で調べ検索できるようになっている。その生き物が大阪のどこにいるのか、博物館の標本や文献情報から分布図を描くことができる。また、過去の特別展で作製したビデオの映像、鳥、昆虫、蛙の鳴き声も聞くことができる。

この情報コーナーは、「大阪の自然誌」だけでなく、「自然の情報コーナー」とが組合わさることにより、自然の好きな人、自然を学びたい人と学芸員との交流の場にしたいと考えている。

3. ミュージアムサービス

博物館本館の普及センターの機能と役割が、「自然の情報コーナー」の前面に移りミュージアムサービスとしてさらに発展し、学習したい人のための有償サービスを担うコーナーである。友の会の案内と入会受付、博物館や友の会のオリジナル出版物やグッズ、自然科学に関する一般書籍、観察用具などを扱う自然史博物館ならではのコーナーである。友の会の会員には書籍の割引販売というメリットがある。

友の会は自然史博物館を利用して学習する人々の会であるが、これを取り込んで母体となる特定非営利活動法人（NPO 法人）「大阪自然史センター」が2001年9月14日に大阪府知事から認証された。このNPO 法人の設立目的は、広く自然史科学の発展と普及に取り組み、市民の自然に対する理解を深め、あわせて大阪市立自然史博物館の事業に寄与するとある。

特定非営利活動に関わる事業には、①友の会事業…博物館を利用して自然と親しみ、学習しようとする人々に情報提供等を行う、②ミュージアムサービス…来館者や市民の学習意欲と様々なニーズに応え、自然史科学の普及を図るため、書籍・観察用具などを提供する、③ボランティア事業…自然史科学の普及に寄与するボランティア事業、④出版事業…自然史科学普及のため必要な書籍等を出版する、⑤その他…本法人の目的達成に必要と認められる上記以外の実施などがある。このNPO 法人は、友の会事

業を中心とした幅広い事業を実施する。

4. ネイチャーホール（特別展示室）

2階のネイチャーホールは、床面積約700㎡、天井高7mの広々とした空間で、これまでの博物館本館の特別展示室が約260㎡であったので約3倍の広さになる。このホールは可動壁によって間仕切りができるため、小さな展示会も行うことができる。今後は博物館主催展や共催展も含め様々な特別展の開催が可能になった。また、展示だけでなく、椅子席にすると500人規模の自然史関係の講演会などに使用することができる。

5. 地下収蔵庫

1974年に建てられた博物館本館には、床面積1,000㎡、天井高3mの収蔵庫が整備されたが満杯となってから久しい。2001年春に開設の「花と緑と自然の情報センター」の地下には、床面積2,000㎡、天井高7mの収蔵庫が設けられている。

地下収蔵庫には、アルコールやホルマリンにつけた液浸標本を収めた「液浸収蔵庫」、化石・鉱物・岩石などを収める「一般収蔵庫」、昆虫標本・植物標本など温度・湿度の管理を必要とする「特別収蔵庫」の3部屋に分かれている。地下に設けられた収蔵庫であるため、防湿対策として下層に水抜き空間が設けられ、さらに特別収蔵庫は木質の内張をするなどの対策が施されている。特別収蔵庫は博物館本館第2収蔵庫と同じ気温20℃、湿度50%に保たれている。この3部屋の収蔵庫をあわせた収容力は、現在の博物館本館の第1から第4収蔵庫までの合計収容力の約3倍であると推定される。地下収蔵庫には、収集された現生生物、化石、岩石、鉱物、地質資料など約100万点もの標本が収蔵されている。一般の人は普段見学することはできないが、この収蔵庫こそが自然史博物館の、自然の情報センターの発信すべき自然環境の情報源なのである。

おわりに

大阪市立自然史博物館の新たな展開について簡単に紹介したが、今後も自然を好きな人・自然を学びたい人の期待に応えられるよう、さらなる進化を望むものである。

青葉を飾る

黒田 一 充

『古事記』（垂仁記）には、言葉を発することができなかった本牟智和氣王が、出雲大神に参拝しての帰りに、喋ることができるようになったきっかけの話が載っている。

出雲国造の祖先の岐比佐都美は、肥河（斐伊川）の中洲に皮のついたままの黒木の橋を架け、仮宮の中に王を籠らせて、「青葉の山を鋳りて、其の河下に立てて、大御食 献らむ」と、肥の川の川下に青葉の木々で飾った仮山を造って食事を勧めた。すると、今まで喋らなかった王が、「是ノ河下に、青葉の山の如きは、山と見えて山に非ず。もし出雲之石^{いはいくものそのみや いま あしはらし}之曾宮に坐す草原色許男大神をもち拝く祝が大庭か。」と尋ねたという。「あの青葉の山は、山に見えて山ではない。出雲大神に仕える神主の祭場か」という意味だが、喜んだ随行の人びとは、王を檣^{あらまき}の長穗宮に移して、都へ知らせるために駟^{はやまつかひ}使を送った。その後、これを聞いた天皇は、神のための宮殿（出雲大社）を建てたという。

ここに見える青葉の茂った草木を飾った仮山は、祭りで神霊を迎える施設の古い姿を伝えている。草木で仮山を造ることは、現在も各地の祭りに見られる。



大島水門祭のお山
（倒されるところ）

京都府八幡市の石清水八幡宮の青山祭では、頓宮の前に櫛枝で八角形に囲んだ神籬を造る。和歌山県串本町大島の水門神社では、大島港に檜・椎の枝葉を使って高さ約5メートル、底辺約2メートル四方の四角錐のお山を造る。もとは、小正月に行われたため、内部には注連飾りや門松などを納め、祭りの最後に倒される。

また、兵庫県姫路市の射楯兵主神社で60年に一度行われる一ツ山大祭や20年に一度行われる三ツ山大祭では、それぞれ直径約10メートル、高さ約18メートルの絹布を巻いた置き山を造り、頂部に山上殿という祠が祀られる。その祠の四隅や置き山の側面には、松などの常盤木^{とこえきぎ}が取り付けられる。天皇の即位儀礼にともなう大嘗祭^{じようさい}に造られる標山をまねたとされる兵庫県篠山市の波々伯部神社の造り山神事に青竹で2基造られる御山（胡瓜山）でも、高さ約8メートルの心柱の上に松枝を刺している。

このように、青葉の山を飾る様子は現在の事例から想像ができるが、本牟智和氣王が籠った仮宮とは、どのようなものだったのだろうか。

大嘗祭では、新しい天皇が籠って新穀を捧げる大嘗宮に悠紀殿・主基殿という仮設の建物が建てられる。『貞観儀式』には、「構以_レ黒木、葺以_レ青草、（中略）壁部以_レ草」とあり、黒木を柱にして青草（萱）で屋根も葺かれ、壁も萱（草）を芯として、内外とも席で覆ったという。これらは、祭りの7日前に建て始め、3日前に完成させた。もっと以前に建てないのは、青草が枯れないうちに祭りをを行うためである。

『古事記』の記述は、神霊を迎える依代となる仮山と、忌籠りを行う仮宮とは別の施設であったが、悠紀殿・主基殿は内部で祭祀を行っている。忌籠りの場所であるとともに、神霊を迎えて祭祀を行う、祭りの場としての機能を持つ。

この大嘗祭の建物と似たものを建てると文政年間（1818～30）の『金毘羅山名勝図会』に絵入りで説明されているのが、香川県琴平町の金刀比羅宮の精進屋である。

10月の祭りには、象頭山麓の四村から庄官と

いう決まった家筋の大頭屋と、他の惣百姓から選ばれる小頭屋が選ばれた。それぞれの頭屋宅の敷地内には、藁葺きで平入りの精進屋が建てられた。頭屋とその男児の頭人、頭人とともに夫婦の体をしたという女頭人、彼らを世話する頭司、頭婆（飢取婆々）が、祭りの前の約1か月間そこに籠って精進潔斎をしたという。

現在は頭屋も1軒になり、男女2組の頭人は希望者を募集するようになって御籠りはなくなっているが、精進屋は祝舎と呼ばれて、本宮の神輿が担いで下ろされる麓の御神事場に1軒だけ建てられる。

黒木と竹を材料にした間口約3.6メートル（2間）、奥行き約7.2メートル（4間）の建物で、壁は藁で覆われる。屋根は板張りで、中央に丸に金の文字の神紋を描いた白布が張られる。入り口は妻入りで、正面に木の鳥居、左右に提灯が吊るされる。建物の後ろ側には、オハケが立てられる。これは、先端部に3つのカンドリという飾りと御幣が付けられた約8メートルの竹である。平入りが妻入りになっている以外は、江戸時代と同じ形態である。



金刀比羅宮の祝舎

内部には天井はなく、中は畳敷きで入り口に囲炉裏がある。正面奥には御幣と櫓が立てられ、その手前に供物などが並べられる。奥の壁だけは、青竹の矢来と檜葉で一面覆われている。中央上部に千木を付けた庇と両開きの扉があり、その中に小祠が祀られている。祝舎も、単なる頭人たちの御籠り場所だけではなく、神霊を迎えて祭りをを行う場所でもある。神霊を迎える神

棚の周囲の壁が檜葉で覆われているところにも、青葉で飾る伝統が残っている。



祝舎の内部

青葉ではないが、ススキ（尾花）で覆われた建物に籠る所もある。

長野県の諏訪大社は、諏訪湖をはさんで上社（諏訪市）と下社（下諏訪町）に分かれているが、両社の祭礼は共通している。

旧暦7月下旬の御射山祭は山の神に対する祭りで、鎌倉時代には武士たちが参加して、3日間狩りが行われ、獲物を神に供えた。その際、神霊を祀るための四御庵や、大祝と神職たちが泊まるための仮設の建物は、穂が出始めたススキや菅で屋根と壁を葺いたため、穂屋と呼ばれた。

承和三年（1312）に完成した『玉葉和歌集』（巻10）には、「尾花ふく ほやのめくりの一村に しはしりある 秋のみさやま」という下社の大祝・金刺盛久の和歌が載っており、尾花で葺かれた穂屋の様子が詠まれている。下社の方は、霧ヶ峰の八島湿原の南東に旧御射山神社があり、そばにある旧御射山遺跡の階段状の土壇の上に穂屋が建てられたと推定されている。

上社は、今も北八ヶ岳山麓の御射山神社（富士見町・原村）で行われているが、現在は両社とも山の神の祭りから数え二歳の乳児の健康を祈る祭りになっている。当日はススキの穂のお守りが授与されるほか、赤ちゃんを連れた家族が境内を流れる小川でドジョウを放流して病気などの厄を託す風習がある。

上社の祭りは8月26日から始まり、御射山神社の祭神の国常立命の御輿が、原山に向かう。御輿といっても御霊代を乗せた駕籠で、古くか

らこの祭事への奉仕を受け持つ富士見町御射山神戸地区の男性2人が担ぐ。山に登るところから、「登り祭り」とも呼ばれる。上社を朝に出発し、上社前宮の月次祭と境内にある溝上社、柏手社の例祭を行い、午後に酒室社（茅野市宮仕坂室）、大山祇社（原村柏木）、關盧社（原村室内）に寄って神事と直会を行い、夕方に御霊代を御射山社に安置する。



御射山祭 虚空蔵堂前の御輿

翌27日の本祭は、諏訪大神の御輿が上社を早朝に出発し、国常立命の本地仏の虚空蔵菩薩を祀る虚空蔵堂（原村ハツ手）、津島社（原村中新田）に寄って御射山神社に向かう。いずれも御狩りの行事に出る行列が、休んだ場所だとされている。

途中に立寄る集落では神社名を入れた幟（のぼり）を立てて氏子たちが出迎え、子どもを御輿の下にくぐらせて健康を祈る。また、神事の間、御輿を安置するため、ススキを使って穂屋が造られた。しかし、現在残っているところは少なく、虚空蔵堂ではススキの壁が作られてその前に御輿が置かれ、付近の家でもススキを飾った高張提灯を玄関前に掲げる。次に寄る津島社も、近年まで社殿の前に毎年穂屋が建てられていたが、現在は屋根と柱だけの常設の建物になり、祭りのときだけ柱にススキが飾られる。

唯一残る穂屋は、御射山神社境内の国常立命の祠の横にある。間口約5.4メートル（3間）、奥行き約3.6メートル（2間）の柱と片流れの屋根だけの建物で、祭りのときには高さ180センチほどのススキの穂で囲んで壁にする。室内は暗く、昼間もロウソクを灯している。左側の軒下は炊事場になっており、祭りの間は神職が



御射山神社の穂屋

穂屋の中に泊まるほか、食事や控え場所に使われている。

諏訪社の穂屋は、普段は屋根と柱だけの建物の壁を植物で覆ったものだが、同様のものが沖縄でも見られる。久高島では、12年ごとの午年の旧暦11月にイザイホーと呼ばれる島の主婦が神女になる儀礼が行われる（ただし、2002年も該当者がなく、1978年が最後となった）。この祭場となる久高殿内にある神アシャギという建物は、普段は屋根と柱だけの建物だが、この祭りのときは、御嶽に生えているクバの葉で壁が造られ、中に神女たちが入って儀礼が行われる。また、その背後に七つ屋という2棟の籠り家が建てられ、クバの葉やススキの穂などで屋根や壁が覆われる。近年は竹を編んだものになったようだが、昔は床もクバの葉を敷いたという。

久高島の対岸にある斎場御嶽は琉球王国の聖地で、開徳大君が就任の時に初めてここに来て霊威付けをする御新下りには、御待御殿が建てられた。萱葺き屋根で、床は砂をまいた上に藁席を敷き、さらに畳を敷く。壁は竹と萱で編んだ苫で仕立て、側面にはクバの葉を張った。土間にまく砂とクバの葉は久高島から運ばれたが、枯れないようにクバの葉は、2、3日前に張ることになっていた。

奄美から沖縄本島北部の集落には、祭りをを行う広場があり、そこには神アシャゲと呼ばれる建物がある。寄棟造で、掘立柱と軒の低い屋根だけの壁も天井もない建物で、祭りの際にはこの中に神人たちが座って儀礼を行う。現在はほとんどが赤瓦になって、軒も高くなっているが、伊平屋島や伊是名島、本部町具志堅などではススキの穂で屋根を葺いたものが残っている。そ



比地の海神祭（神アシャゲ内部の根神）

れらは軒が非常に低く、70センチぐらいのものもあり、のぞきこまなければ外部からは中の様子をうかがい知ることができない構造をもっていた。

国頭村比地で、旧暦7月の盆後の亥日に行われる海神祭には、アサギの森で各集落の人びとが門中ごとに集まって、それぞれの拝所に供物を供える。神アシャゲの中には白い衣裳を着て頭に植物の蔓を巻いた神女たちがすわり、それぞれの門中の男性が守り神である神女に供物や祝儀袋を渡し、盃を交わして祈る。

神アシャゲの前の庭（広場）ではイノシシ狩りや舟漕ぎの儀礼が行われるが、庭の端には四隅と中央の五本の竹を立て、屋根と床にクバの葉を敷いただけの仮屋が建てられる。高さは1.5メートルほどで、特に儀礼にも関係はない。地元の人に尋ねると、アシャゲの森の入り口に

ある集落の草分けの旧家（根屋）の庭先にもっと大きいものを建て、その家から出された根神や他の神女たちが、祭りに先立って籠った小屋の名残だという。もとは藁屋根だというのが、壁はクバの葉で覆われていたのではないだろうか。神アシャゲの原型を、思わせるものである。

神アシャゲについては、その名前の意味も含めてよくわからない点が多いが、イザイホーのように、本来はこの中に籠って祭りを行ったのではないだろうか。諏訪社の穂屋がススキの穂で壁を覆ったように、壁や床、時には屋根や床もクバの葉で覆われた仮屋の中に神女たちが籠って祭祀を行っていた。

このように、仮山だけではなく、祭りのために司祭者たちが籠る仮屋も青葉で飾られていたことが、日本列島の各地に残る事例から推定できる。

沖縄ではクバの青い葉を使って、祭りの仮屋を建てている。このクバというのは檳榔のことであり、檳榔の葉で覆った仮屋に籠ったのである。大嘗祭に先立って、10月に鴨川の河原などで行われた天皇の御禊には、百子帳というものが作られる。『兵範記』（仁安3年10月20日条）や一条兼良の『代始和抄』には、四方に帷を掛けて前後を開いて出入りするようになっており、その中の大床子に座った天皇が手水を行ったという。その頂部は檳榔の葉で葺かれていたと記されており、『古事記』に見える「檳榔の長穂宮」というのも、神霊を祀るために籠った仮屋だったのであろう。



比地の海神祭の仮屋

濱本正吉氏伝来の具足（甲冑）

関西大学博物館は、平成13年8月に、大阪府大阪市東淀川区淡路在住の濱本正女氏から、濱本正吉氏伝来の具足のご寄贈をいただいた。ここでは、このご寄贈いただいた具足を紹介したい。なお、この資料の実検には、奈良県立美術館館長、宮崎隆旨氏のご教示をいただいた。

濱本正女氏よりご寄贈いただいた具足（甲冑）は、正式には、「紺糸威菱綴桶側二枚胴具足」と呼ばれるもの、一領である。内容は、頭形兜と頬当、袖、籠手、佩盾、臑当の「具足」で、具足櫃が伴う。胴前高39.0 cm、胴後高41.5 cm、胸廻り106 cm、草摺長23.2 cmである。

胴は黒漆塗の鉄板札てつぱんさを具足の定形通り前立拳三段、後立拳四段、長側五段に配して、各段を革で菱綴し、左脇ひだりわきを蝶番で繋いだ二枚胴である。草摺は通常よりやや横幅の広い練革製の切付伊予札六間五段を紺糸で素懸すかけに威す。立襟・小鱗こりんは共に亀甲鉄を白革なめしがわで包み、這わせ糸は萌葱、菱綴は紺糸を用いる。背の旗指物の装置は設けていない。

兜は天辺あまへの板を眉底板の上に重ねたいわゆる越中頭形鉢えちゅうがうがひ、黒漆塗の鉄板は分厚く、一般的

な頭形鉢に比べてかなり重い。鉢は黒漆塗の鉄板札五段を紺糸で素懸すかけに威す。頬当は黒漆塗の目の下頬、面は通常見受けられる別板を掛け外しする鼻板はなく一枚板を打ち出し、裏は朱塗、鉄板札三段を紺糸で素懸すかけに威した垂を下す。

袖は黒漆塗の大型鉄板四枚を紺糸で各段三カ所菱綴するだけの簡易な当世袖である。

籠手は肩に小篠板を散らして鎖で繋いだ五本篠籠手、手甲は平板のままで指型を打ち出さな海鼠手甲とする。

佩盾は黒漆塗革小板十一枚四段からなる板佩盾で、金で大きく日の丸を表す。

臑当は七本篠臑当、内側下に栗色革の鉸具摺を設け、上部に紺糸で菱綴した山形の亀甲立拳を付ける。

総じて質実な造りながら兜・小具足が揃った具足である。江戸時代前半期後半と考えられる。兜が異例に重く、やや実用範囲を逸脱した感があるのは、製作時期の様相の一つであろうか。

博物館では、濱本正女氏よりご寄贈いただいた具足の調査と点検を行っており、準備が整った時点で展示・公開していきたいと考えている。



諏訪湖の石器と土器

——本山資料830番——

山口 卓也

関西大学博物館に所蔵されている本山資料の収集を大正期に行なった本山彦一氏（1853～1932）は、極めて精力的な収集活動を行ったことで知られている。日本列島全域はもとより、中国、朝鮮半島にも、まとまった考古学資料がある。本山氏自身で調査を主催したものや地域の協力者の手によるもの、購入物件と思われるものも含まれ、体系的・網羅的な収集と展示を意図していたと考えられる。

関西大学博物館所蔵の本山資料には、多くの長野県由来の資料があるが、その830番は現長野県諏訪市出土である。本山考古室要録では、登録点数は「一括」、内容は石鏃、獣骨、土器片「内二個湖出土の土器口縁部あり」となっている。現在関西大学博物館で所蔵しているのは、石鏃4点、尖頭器2点、石核3点、剥片5点、土器片7点、骨片5点があり、合計26点である。この土器のうちの1点に「諏訪湖中」との朱書きが認められる。

石器類は、黒燐石、頁岩、安山岩製で、極小型尖頭器や中型尖頭器、石鏃があり、楔形をした黒燐石製石核が2点含まれる。剥片類には縦型長方形の剥片があり、楔形の石核とその剥片の対応を見いだせる。土器には、「諏訪湖中」と朱書きされた口縁部を含めて縄文後晩期2点、縄文中期の土器片錘で水磨の進んだもの1

点、爪形文土器片4点がある。爪形文土器片は総じて薄手で、上向きに散漫な爪形を施した口縁部、極小爪形を連続施文するもの、ハの字施文、密着施文など、4点の紋様に斉一性はないが、縄文草創期の所産である特徴を示している。獣骨は、大型獣脚骨または肋骨と脚骨関節部、鳥類脚骨で、獣骨には軽い化石化が認められる。石器類と土器類の一部を図示する。

諏訪湖には、縄文時代草創期の湖底遺跡として有名な曾根遺跡がある。曾根遺跡は、長野県諏訪市大和の沖合500mの水深2mにあり、明治41年10月に発見された。坪井正五郎氏により人類学雑誌で「杭上住居」説が提唱され、これが明治期の有数な論争を引き起こしたこと、また故藤森栄一氏が諏訪考古学研究所を主催して戦後の調査を続け、また昭和40年に名著「旧石器の狩人」で取り上げたことでも有名である。

曾根遺跡では、長脚鏃や円脚鏃、鋏形鏃、剥片鏃など多様な形態の石鏃が膨大な量発見されており、拇型搔器、錐状石器、尖頭器、ナイフ形石器などが伴う石器群と、わずかの爪形文土器群があるという。縄文時代草創期の爪形文土器単相の遺跡として理解されている。関西大学博物館の本山資料830番は、土器に爪形文土器を含むこと、石器の一部の器種が一致することから、曾根遺跡の遺物内容に共通点が多い。た



第1図 関西大学博物館 本山資料830番の土器

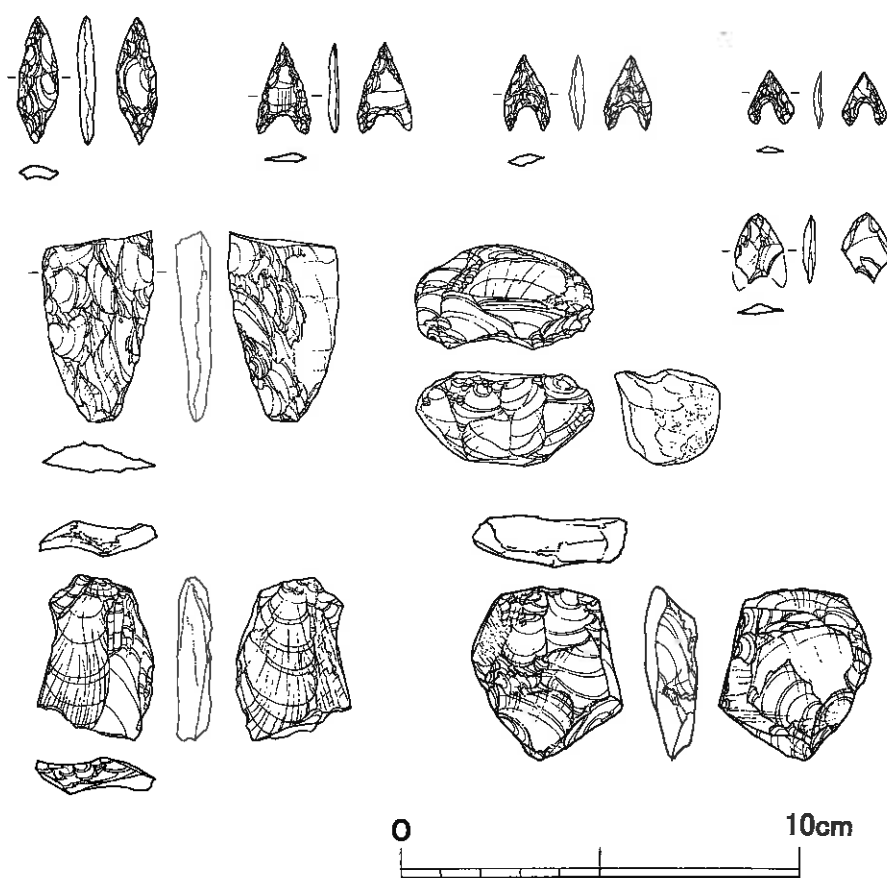
だ朱書きされた縄文後晩期の土器は、明らかに曾根遺跡資料とは同等に扱えないし、獣骨の化石化も異質である。

この曾根遺跡では、シジミ取り船の引揚げによる遺物の採集活動が、発見時の明治40年代から大正9年の鳥居龍蔵氏による調査を契機とする大正期、昭和まで大量の遺物をもたらしたことが知られている。特に大正期以降は、諏訪湖周辺で地域収集家による石器時代遺物収集競争があったことが知られており、石器時代資料を曾根資料と称するなど、一部には出土地の混乱した資料が混じったことがあったと、藤森栄一氏が紹介している。

関西大学博物館の本山資料830番は、本山考古室要録の出版が昭和10年で、本山氏による本山考古室の資料収集の蓄積が進んだのは大正10年頃であることから、土器の朱書き内容などから考えると、諏訪湖の曾根湖底遺跡周辺のもの

である可能性が高いと考えられる。後晩期土器片などは曾根遺跡のものとは考えられず、混乱が生じている。本山彦一氏は、大正期に各地から多くの資料を収集したが、直接手を染めた国府遺跡や津雲貝塚などを除くと、それぞれの地域研究者に依頼した収集品である可能性が高いと思われ、この関与者の存在と大正期の諏訪湖周辺での採集熱の存在が、遺物の混乱を生んだのではなかろうかと推測させる。曾根遺跡の資料は、東京大学や諏訪考古学研究所などで保管されているが、一方では散逸したものが多数あったことも知られている。

曾根遺跡は、現在浚渫や蜆取りから保護されて、諏訪湖底に横たわっている。平成14年夏に、博物館資料の出土地調査で諏訪湖を訪れたとき、現地を湖岸より観察したが、西日が水面に映えるのみで、その姿を捉えることが出来なかった。



第2図 関西大学博物館 本山資料830番の石器

博物館だより

◇平成14年度関西大学博物館 開館日数・入館者数（入館者数は3月17日現在）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	24	23	20	19	1	7	19	18	14	12	11	9	177
入館者数	718	1,614	331	1,278	547	355	420	501	175	71	28	285	6,323

◇平成14年度開催の考古学入門講座

「東アジアの「よろい」と「かぶと」」の開催

10月26日（土）から11月23日（土）まで毎土曜日5回の講座を行い、合計587名の受講者がありました。講座の内容と講師は次のとおりです。

第1講 10月26日（土）

関西大学名誉教授・関西大学飛鳥文化研究所所長 網干善教
東アジアの「よろい」と「かぶと」

第2講 11月2日（土）

大阪市文化財協会調査研究部第2係長 高橋 工
朝鮮半島の「よろい」と「かぶと」

第3講 11月9日（土）

奈良文化女子短期大学助教授 来村多加史
中国の「よろい」と「かぶと」

第4講 11月16日（土）

御所市教育委員会学芸員 藤田和尊
古墳時代の「よろい」と「かぶと」

第5講 11月23日（土）

奈良県立美術館館長 宮崎隆旨
平安時代以降の「よろい」と「かぶと」



◇平成15年度 関西大学博物館企画展並びに博物館講座の開催について

平成15年4月7日（月）～5月17日（土）の間、企画展「東アジアの壁画古墳」を関西大学博物館第2展示室にて開催いたします。入館料は無料、期間中は日・祝日休館です。多数のご来場をお待ちしております。

また、企画展に関連して博物館講座「東アジアの壁画古墳」を5月17日（土）午後1時半から3時半まで行います。演題と講師については次のとおりです。

網干善教 関西大学名誉教授「東アジアの壁画古墳」

会場：関西大学千里山キャンパス 尚文館 マルチメディア AV 大教室

博物館講座の聴講も無料です。どうぞふるってご参加ください。

編集後記

『汗流』第46号をお届けいたします。今号は芦屋市教育委員会の森岡秀人氏、鉄川精名誉教授、黒田一充助教授に玉稿をいただきました。ご執筆くださいました先生方に感謝申し上げます。また、山口卓也学芸員より、本館所蔵の本山資料についての出土遺跡の調査報告をさせていただきました。

本文でご紹介いたしておりますが、濱本正女氏より「濱本正吉氏伝来の具足」の寄贈があり、本館の甲冑資料がますます充実いたしました。濱本氏に厚く御礼申し上げますとともに、甲冑資料についてご教示くださいました奈良県立美術館館長宮崎隆旨氏にも深謝申し上げます。

羽関平安理事長へのインタビュー（2）は、理

事長先生が熱く語る「これからの関西大学博物館」です。先代の平三郎氏と親子二代にわたる関西大学への熱き思いに胸を打たれます。理事長先生の思いにこたえられるよう、博物館として努力していきたいと思います。

表紙は銅鏡、草花飛禽八稜鏡です。唐式の八稜鏡に間違いありませんが、八稜鏡ではよりダイナミックな図紋が望まれるのに対し、この草花飛禽八稜鏡では雀など弱小な小禽や貧弱な草花紋など、意識的に矮小・繊細な図紋が選ばれています。その結果、温和・平明な情趣を醸し出し、また、我々日本人が自然の中に親しく見出せる題材であるために、和風な趣を感じさせてくれます。